

# 2 内的変化

## 1 人口構造の変化

横浜市民の平均年齢は三三・二歳。全国平均三三・九歳、一一大都市平均約三三歳と比べると、若さあふれるといたいところだが、三五年から三・七歳もあがってしまった。

この年代は戦後のベビーブーム世代に当たっている。

### ●人口ピラミッドの変化

年齢構成とその動きを人口ピラミッドでみてみよう。

三五年には、二〇歳台にピークがあり低年齢層が少ない紡糸型であった。四〇年代に入って急激な人口流入が続くとともに、第一次ベビーブーム世代の結婚年齢到

来による第二次ベビーブームの時期にさしかかったことが重なり、四五年には星型へと変化した。五

五年になると、四八年以降の出生児数の減少により、五歳〜九歳児に第二のピークができて、そろばん珠二つ型へと変化した(図一)。将来の人口ピラミッドは、ますます複雑な型となるだろう(図一・二)。

### ●高齢化社会が接近

ここで六五歳以上の人口が総人口に占める割合の動きをみよう(図一・三)。

三五年には四・一%、四五年には四・五%、五五年には六・二%

とふえているが、この数字は一

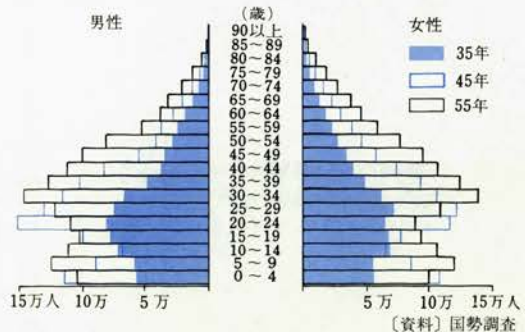
大都市のなかでも低位のほうである。しかし、六五年推計値では九・四%となって現在の全国平均を超える。七五年には一五%に達し、市民の実に六・七人に一人はお年寄となる。やはり高齢化社会は横浜にも確実に接近してきている。しかも、年少人口(一五歳未満)が減少するという傾向をともなっている。

### ●六人に一人が引越

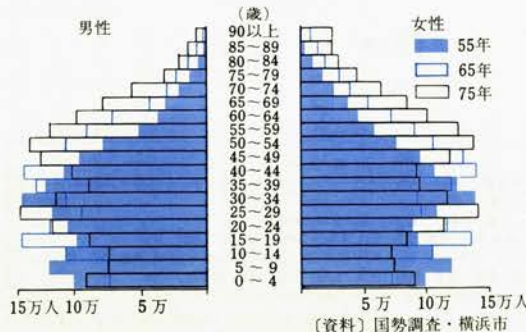
人口の動きをもう少し詳しくわくみてみよう。

三五年から五五年までの二〇年間で、横浜の人口は二倍になった。

図一 人口ピラミッド昭和35年・45年・55年



図二 将来人口ピラミッド 昭和55年・65年・75年



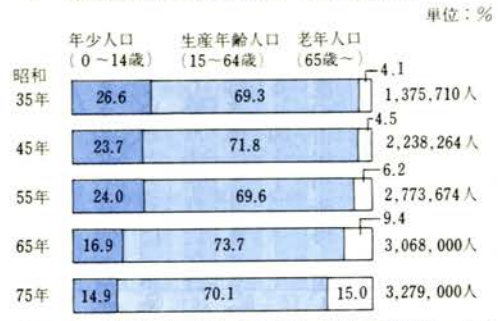
六二人を頂点にしないで減ってき  
ピークを迎えた四七年の五万三五  
外として、第二次ベビーブームの  
数は四一年のひのえうまの年を例  
生数―死亡数)からみると、出生  
増加の原因をまず自然増(出生

二四%、一年間に市民の四人に一  
が移動した。人口の割合にして約  
市内・市外を含めて六〇万近い人  
内部でも生じている。四六年には  
人口移動は市外ばかりでなく市  
社会増は二万八〇〇〇人であった。

一〇万人前後の激しい人口増加で  
四三年から四六年の四年間は年間  
五万三〇〇〇人の増加を続けた。  
〇〇人の増加、後半の一〇年間で  
前半の一〇年間に年平均八万六〇

激に減少し、五〇年以降は転出、  
転入者数ともに一七―一四万人台  
を推移している。社会増は四五年  
の六万七〇〇〇人をピークに減少  
傾向にあったが、五六、五七年は  
ふたたび増加している。五七年の

図-3 年齢別人口構成の推移 (各年10月1日)

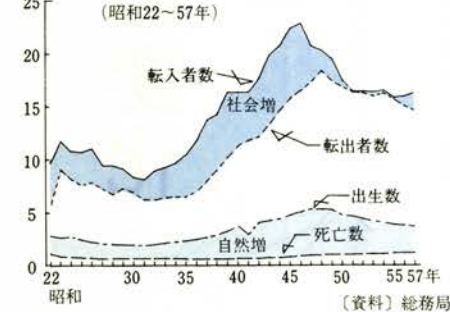


(注) 55年の構成割合は年齢不詳を除く [資料] 国勢調査・横浜市

とには変わりない(図-4)。  
次に、もう一つの要因である社  
会増(転入者数―転出者数)を  
みよう。転入者数は四六年(二二  
万八〇〇〇人)、転出者数は四八年  
(二万三〇〇〇人)をピークに急

ている。他方、死亡数は三六年の  
五四〇四人を最低にしないでい  
え、四九年以降は一人を超えて  
いる。この傾向は続くと予想され  
るので、自然増加は今後も減少し  
ていくだろう。自然増は減少傾向  
にあるが、人口増加要因であるこ

図-4 社会増(転入-転出)および自然増(出生-死亡)の推移 (昭和22-57年)



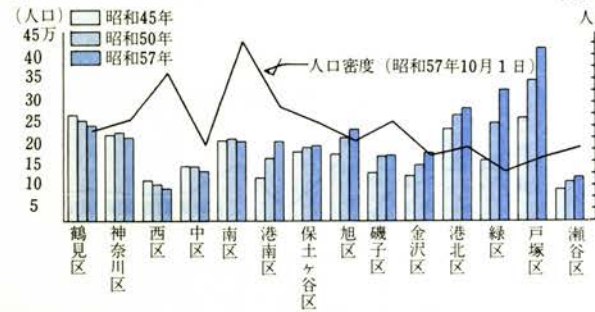
[資料] 総務局

区で八〇〇〇人を超える人口減少  
を示しており、五一年ではこの五  
南の五区では五〇年以降減少傾向  
を示している。鶴見、神奈川、西、中、  
心部の減少と郊外部の増加という  
ドーナツ化といわれる状況を示し

● 中心部から郊外へ

人が引越したことになる。  
五七年には一六・四%、六人に一  
にこの割合が一〇%台へ落ち着き、  
人は引越した勘定である。五〇年

図-5 区別人口推移と人口密度



[資料] 総務局

があつたが、最近はこの傾向が落  
ちついてきている(図-5)。  
一方、周辺部ではかなりの人口  
増加がみられ、五七年では戸塚区  
で八〇〇〇人、緑区で一萬五〇〇  
〇人、旭、金沢区でも五〇〇〇人  
以上が増加している。すでに開発  
された地域での人口定着などが進  
むことにより、この傾向はしぼら  
く続くものと思われる。